# 保護者と共に成長を喜びあえる指導員に

板宮貴久子
宮城県東松島市　放課後児童クラブサルビア　指導員

私は経験七年目の指導員です。保育士や教諭の資格もなく、子どもに携わる仕事も未経験のまま、「先生」と呼ばれる立場になりました。四月一日の初出勤の際には、「やっていけるのだろうか」と不安だったのをおぼえています。

一年目は、基礎となる新人指導員研修を受講しましたが、主な内容は、児童館職員向けの講座でした。そのほかにも、市内のすべての学童保育を対象とした工作指導の研修を受講しました。二年目には、市の担当課による全体研修として、幼稚園の園長先生を講師に招いた講座と、救命講習が実施されました。

私は、自宅が被災し、東日本大震災前の資料がなにも残ってはおらず、記憶にあるのはこれくらいです。当時の私は、学童保育連絡協議会の存在や、全国学童保育指導員学校、もちろん、全国学童保育研究集会(以下、全国研)のことなど、なにも知りませんでした。市から配布された「指導員マニュアル」が唯一のテキストで、月刊『日本の学童ほいく』や、学童保育に関する書籍も、地元の書店には並んでおらず、手にとったことすらない状態で、日々、子どもと関わっていたのです。宿題を見たり、一緒に遊んだりはしていても、普段との様子の違いや気持ちの変化などに気づいて声をかけるなど、「心に寄りそう」ことはできていませんでした。「保護者が迎えに来るまでの時間を安全に過ごさせる」。当時は、これだけが指導員の仕事だと思っていたのです。いま考えると、なんと大胆でこわいもの知らずだったのでしょう。

それが、東日本大震災を機に一変しました。当時、保護者が迎えに来られなかった子どもたちと、三日間を一緒に避難所で過ごす経験をし、学童保育の指導員は、ときには親に代わる存在となる重要な役割を担っているのだと認識させられ、「このままではいけない」と、考えるようになったのです。しかし、具体的には、なにを、どう勉強すればいいのか手探りのままでした。

そんなときに、復興支援の一環として、宮城県学童保育緊急支援プロジェクトの皆様をはじめ、NGOセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンなど諸団体のご尽力により、たくさんの研修が行われるようになりました。

埼玉県や神奈川県などの経験豊かな現役指導員を講師に迎えての宮城県学童保育講座や全国学童保育指導員学校、近隣市町村との合同研修会などへの参加、全国研への交通支援など、研修を受講する機会が格段に増え、自ら積極的に参加して勉強するようになりました。

そして、これらの研修を通じて、子どもたちだけではなく、保護者にも徹底的に寄りそい、否定せずに受けとめ、子育ての支えとなりはげますという保育実践を、具体例をあげながらていねいに解説していただき、心を打たれたと同時に、衝撃を受けました。また、以前は「担当課からの出席要請があった研修にのみ参加すればいい」と思っていた自分の姿勢を恥ずかしいと痛感しました。

このたび、二〇一五年一一月に大阪で開催された全国研へ、宮城からの特別報告をすることになった放課後指導専門員の方と一緒に参加することができました。全国研への参加は二〇一四年にひきつづいて二回目となります。向上心の高いバイタリティにあふれる方々と交流する時間を持てた経験は、この先、私にとってかけがえのないものとなるでしょう。

子どもたちにとっての、「いつもと同じ生活がある毎日」が保障されるように、これから先も、悩み、ぶつかりあいながら、本気で関わり、成長を喜びあえる指導員になれるよう精進していきたいと思います。

最後に、この場をおかりして、全国の皆様のあたたかいご支援に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。